

村上祐介著 『スピリチュアリティ教育への科学的アプローチ —— 大きな問い・コンパッション・超越性 』 ratik (電子図書)

中川 吉晴 同志社大学*

Murakami, *A Scientific Approach to Spiritual Education:
Big Question, Compassion, and Transcendence*

NAKAGAWA Yoshiharu



著者の村上祐介先生は、本学会における新進気鋭の心理学者であり、スピリチュアリティ研究に本格的に取り組んでいる数少ない若手研究者である。本書は、スピリチュアリティに関する広範な心理学的研究をふまえ、スピリチュアリティ教育の大きな見取り図を示したものである。意欲的な仕事であり、国内では心理学者による初めての成果であると言えよう。

第1章では、ウィルバーや榎尾直樹氏のものをつくめて、さまざまな分野のスピリチュアリティの定義が紹介され、整理されている。第2章では、教育におけるスピリチュアリティに焦点を移し、教育のなかでスピリチュアリティがとりあげられる意義について、ホリスティックな人間観への拡大が必要であること、学生がスピリチュアルな欲求をもっていること、文化的多様性の時代に生きていることを指摘したうえで、UCLA 高等教育研究所のアスティン等が全米の大学生を対象に行なった大規模な調査を紹介している。この調査では学生のスピリチュアリティが学業面などにも影響を及ぼすことが明らかにされており、その結果、大学には、学生のスピリチュアルな発達を促進することが求められるようになった。

これらを通観したうえで、村上先生は自分自身の論点を3点に絞り込んでいる(62頁)。すなわち「大きな問い」「コンパッション」「超越性」である。これらが第3章から第5章にかけて論じられる。私とは何か、生の意味や目的、死とは何か、存在や世界の神秘といったことにかかわる「大きな問い」は、主として知性面の働きに関係する領域であり、「コンパッション」は利他的な感情や態度や行動であり、「超越性」は、瞑想等の観想実践をはじめとする個人的体験をおして超越的なものにふれることをふくんでいる。したがって、スピリチュアリティは「生きる意味をありありと感じ、互いに慈しみの気持ちを抱き、超越的次元との強い結びつきを感じられる」(p.62)状態とみなされる。

それぞれの章では、概念規定にはじまり、進化論的考察、脳科学の研究、実証研究、文化との関連、実践に取り入れる際の介入アプローチといったことが述べられ、最後に、それらのシャドウともいえるダークサイドが論じられる。いずれの項目も、それに関連する多くの研究成果が紹介されており、最新の研究にふれることができる。村上先生自身も Big Question 尺度を作成し、実証研究を行なっていることを紹介している。本書の特徴は、実証研究をふまえてスピリチュアリティ教育を考察していることであり、科学的背景のなかに進化心理学や脳科学の成果

* yonakaga@mail.doshisha.ac.jp

を積極的にふくめていることである。

進化論的考察を少し見ておくと、「大きな問い」に関しては、石器時代にはすでに時間意識と死に対する観念があり、それが存在の意味を探究するように駆り立てたとされる。進化の過程で、ヒトは生の意味を問題にし、生に意味を付与するような「心の理論」を獲得した。意味感を抱くことは適応的機能を果たすからである。コンパッションに関しては、脆弱な子孫の養育の必要上コンパッションがもたらされたということ、配偶者選択のなかで利他的な行動をとるパートナーの方が家族や集団にとって利益をもたらすこと、またコンパッションは非血縁者とのあいだで良好な関係をつくりだすことが指摘される。超越性に関しては、超越的・宗教的体験があると実存的不安を減少させ、健康維持に役立ち、コントロール力を高めてコミュニティの秩序と結束を保つことができるという点があげられる。

スピリチュアリティのダークサイドを指摘している点も、本書がバランスのとれた慎重な姿勢をとっていることを示している。さきにあげたスピリチュアリティの特徴に対して、村上先生は、それは容易に達成されるものではなく「むしろ、虚しさ、破壊的・反倫理的な意味や目的、裏切り、思いやる気持ちが義務となってしまうことによる呪縛、超越的次元に関わる中で生じる疑念や暴力、葛藤等、様々な問題が立ち現れているほうが、自然なプロセスと言えるでしょう」（pp. 62-63）と述べている。

「大きな問い」のダークサイドについては、答えをまったく有することなく探究に従事すると精神的健康面で不適応を示すことがあること、探究をとおして破壊的な世界観や目的に結びつくことがあること、ただ単純に探究を良いものとして押し付けることがあることなどがあげられる。「コンパッション」のダークサイドについては、ブラインド・コンパッションがあげられる。

これは、相手との対立を恐れて寛大になりすぎること、見境のない受容をしてしまうこと、怒りや不満を抑えて度を越した忍耐をしてしまうことなどである。

「超越性」のダークサイドについては、スピリチュアル・バイパシングとスピリチュアルな物質主義があげられる。スピリチュアル・バイパシングとは、心理的な問題や発達課題に向き合うことを回避するために、スピリチュアルな実践や教えを利用することである。たとえば、対人関係において防衛的な人が、それを正当化するために無執着や放棄の教えを利用するといった場合である。チョギヤム・トゥルンパの用語として知られる「スピリチュアルな物質主義」とは、スピリチュアルな体験や教えやグルを、獲得や所有の対象とすることである。この場合スピリチュアリティは、商品と同様に消費されるものとなり、所有者の自我肥大をもたらす。さらに安藤治先生の説を引いて、超越的体験が信仰集団のなかで生じる場合、人が排他的な確信を抱いたり、自己を特別視したりして孤立や対立をまねく危険があることがあげられる。最後にトランスパーソナル心理学ではよく知られているスピリチュアル・エマージェンシーと精神病理的症狀の区別の問題がとりあげられる。

第6章では、スピリチュアリティ教育の実践について提言をしている。村上先生は大学で行なえる「ベーシックコース」としてスピリチュアリティ教育を想定している。カリキュラムとしては、「大きな問い」「コンパッション」「超越性」が相互に関連しあい、さらに一人称、二人称、三人称のアプローチをすべて取り入れたようなものを構想している。実際に村上先生自身がそうした教育に取り組んでいるようである。

最後に村上先生は、スピリチュアリティ教育を、日本の高等教育にまつわる議論のなかに位置づけ、スピリチュアリティ教育が新しい人材

育成に対して十分に貢献しうることを示している。これは、スピリチュアリティ教育をメインストリームの教育に一気に引き入れるという力業である。周知のように大学では、グローバル社会に通用する人材育成を加速させ、自主的に課題を見つけ、それを創造的に解決できるような学生の教育を模索している。このような状況に対し、スピリチュアリティ教育は各文化の多様な世界観や宗教をとりあげ、多文化理解を高めることができる。スピリチュアリティが健康増進に役立つことも教えることができる。また、コスモロジー教育をとおして地球環境問題に取り組むこともできる。政治経済に起因する環境破壊が現実存在するなかで、「スピリチュアリティ教育は、こうした現実への冷静な眼差しを持ちながら、瞑想をはじめとしたコンパッションに関する実践を通して、身体に根差した……、命を慈しむ心を涵養することを目指していきます。そして、そうした基本的な態度を備えつつ、学習者に大きな問い……について考える多様な見方を提示し、一人ひとりが、どのような世界観にコミットすれば生きやすいのかを選び抜く

基礎的な力を育成することが重要になります」(pp. 227-228)と述べられている。

課題発見・解決型の実践知については、たとえば「労働と心身の健康」というトピックをとりあげた場合、スピリチュアリティと心身の健康の関係について多角的に学び、さらに社会人との合同リトリートやワークショップを行ったりして、スピリチュアリティの社会生活における意義について理解を深めることができる。スピリチュアリティと社会生活の関係を考えるなかで、スピリチュアリティに根ざしたサービスやビジネスを展開することもできる。

ただしスピリチュアリティ教育は、経済成長中心の社会のなかで有用な人材を育成するという適応主義に陥るべきではなく、むしろ、よりよい生のあり方を考えるための素材を提供すべきものである。最後に村上先生は、スピリチュアリティ教育が疑似宗教のような押し付けになる危険性をはらんでいることを指摘し、あくまでも科学的知見を取り入れ、それに則って教えることの重要性を指摘する。